



# 「テヘランゼルス」のノウルーズ

## 椿原 敦子

(つばきはら あつこ)

大阪大学大学院人間科学研究科



無病息災を願って焚き火の上を飛びこえる  
年末行事



新年のパーティーで供えられた  
ハフト・スイーン



通り一面を人が埋め尽くす  
ノウルーズの祭り

## 年末は踊って大騒ぎ

イラン暦の元日ノウルーズは、春分の日に当たる。人びとは新年を迎えるための準備として、家の大掃除や墓参り、来客用の食材の用意や、七つの縁起物を中心とする正月飾り、ハフト・スイーンなどの飾りつけなどをおこなう。イラン国外で最大の集住地域であり、イラン人のあいたでテヘランゼルスともよばれるアメリカのロサンゼルス(LA)でも、人びとはノウルーズの準備に忙しい。LAには難民亡命者から留学生まで出国の動機を異にするイラン人が暮らしている。一九七九年のイラン革命以来、アメリカとイランのあいだには国交がないが、人の往来は続いている。

わたしは、留学してきたばかりのS君と彼の母方の伯父とともに、海洋で催されたチャハールシヤンベ・スーリーに参加した。年末最後の水曜日の夜に焚き火をし、その上を飛び越えて新年の無病息災を願う行事である。数年前までイランでは非法とされていたこの行事だが、S君はLAと比べてテヘランの方が人びとは派手に大騒ぎしていると感じを漏らした。焚き火の傍には音響機材が運び込まれ、周りはペルシア語ポップスに乗って踊る人でごった返す。LAは亡命したポピュラー歌手たちの活動拠点であり、音楽への規制が厳しいイランへと海賊盤の流入が現在まで続いている。イランでは不特定多数の人が集まって踊る場はないため、S君にとつて初めての機会である。踊っているS君の携帯にテヘランの母親から電話が入った。S君は母親に、テヘランとは違う祭

りの光景を熱心に話していた。

## イラン人の「ロコミ」社会

この行事が終わると新年の準備が本格的に始まる。イラン系の食料品店にはこの時期だけ、ハフト・スイーンなどの飾りつけに欠かせないサブゼ(大麦などの新芽)や金魚が店頭に並ぶ。ソロアスター教徒であるBさんの食料品店に飾られているハフト・スイーンには聖典アヴェスターが供えられていた。本国イランではコーランを飾るのが一般的だが、ハーフェズやルミーの詩集を供えている家庭もあった。また、ノウルーズはバハイイ教の暦でも新年に当たる。Bさんの店で働くバハイイ教徒のFさんは、新年になるまでの一九日間は教義に従い断食をおこなっていた。

新年には、人びとは家族や友人の家を互いに訪問し合う。イラン系の商店が立ち並ぶウェストウッド通りで開かれた祭りには、一万人近い観客が集まった。そして連日、親戚や友人の家への訪問は続く。おしゃべりのなかでしばしば、新年の「三日目」に外出する行事「スイースタ・ベ・タル」はどこに行くか、という話題が出た。そこで、行き先として皆がそろって口にするのがカリフォルニア南部のとある公園なのである。残念ながらその日まで滞在する事ができなかったが、さそかし多くの人が集まっただろう。家庭を訪問しての交流があらたな人間関係を作り、それが大規模な人の集まりを作る。「ロコミ社会」といわれるLAのイラン人社会のからくりを見た気がした。